

# 蒙古人の始祖説話について

高原 武雄

On the Tales about the Ancestor of the Mongols.

Takeo TAKAHARA

Three types of tales are found concerning the ancestor of the Mongols in the thirteenth century. Among them are two assertions— one is the assertion that Borte Cino, their ancestor, was a wolf and the other, that it was a human being, this research deals with the origin of these two assertions.

## 序

「モンゴル族は文字を知らず、その祖先の名と諸部族の史実を口頭で語り伝えた。」（「K」第2章，P.19）  
 このようにして彼等の始祖に関する説話は三種に分けられるが、その一つ「狼鹿交配説話」では、その始祖——Borte Cino——を狼であるとする説と、人間とする説とがある。本報告ではこれについて研究した結果狼とする説の正当性を論証した。

## 参考文献とその略記号

那珂通世著	成吉思汗実録	1907	略号A
小林高四郎著	蒙古の秘史	1941	略号B
白鳥庫吉訳	音訳蒙文元朝秘史	1943	略号C
岩村忍著	元朝秘史	1963	略号D
小林高四郎著	ジンギスカン	1960	略号E
J・A・BOYLE訳註	JUVAINI著 THE HISTORY OF THE WORLD CONQUEROR	1985	略号F
	元史		略号G
	親征録		略号H
C・D'OHSSON	蒙古史（田中萃一郎訳補）	1939	略号I
ウラヂミルツォフ著	蒙古社会制度史	1941	略号J
佐口透著	モンゴル帝国史	1968	略号K
H・HOWORTH	“HISTORY OF THE MONGOLS” （文殿閣統印）	1938	略号M
護雅夫著	遊牧騎馬民族国家	1967	略号N
江実著	蒙古源流	1940	略号O
	文献通考		略号P

狼鹿交配伝説考

## A 資料

蒙古種族が所有した始祖説話の一つである狼鹿交配伝説に関する資料をあげると。

- (1) 「元朝秘史」（この本の著作年代は正集十巻は1240年であろう）に記載するところは次の通りである。

「迭額<sup>舌上</sup>列<sup>天</sup>騰格<sup>一</sup>理<sup>額</sup>扯<sup>處</sup>札牙<sup>命</sup>阿<sup>有</sup>禿<sup>的</sup>脱列<sup>生</sup>克<sup>了</sup>先<sup>的</sup>  
 孛<sup>舌</sup>兒<sup>格</sup>帖<sup>赤</sup>赤<sup>那</sup>阿<sup>主</sup>兀<sup>有</sup>格<sup>兒</sup>該<sup>該</sup>亦<sup>納</sup>訥<sup>的</sup>豁<sup>埃</sup>埃<sup>白</sup>白<sup>色</sup>  
 馬<sup>舌</sup>蘭<sup>勳</sup>阿<sup>只</sup>埃<sup>有</sup>騰<sup>波</sup>思<sup>水</sup>客<sup>禿</sup>勳<sup>周</sup>亦<sup>列</sup>罷<sup>來</sup>罷<sup>了</sup>  
 斡<sup>難</sup>難<sup>河</sup>沐<sup>澮</sup>訥<sup>的</sup>帖<sup>里</sup>兀<sup>捏</sup>不<sup>而</sup>罕<sup>山</sup>合<sup>勒</sup>敦<sup>敦</sup>訥<sup>行</sup>  
 嫩<sup>禿</sup>禿<sup>黑</sup>刺<sup>周</sup>脱<sup>列</sup>克<sup>先</sup>巴<sup>塔</sup>赤<sup>罕</sup>阿<sup>主</sup>兀<sup>有</sup>  
 營<sup>盤</sup>做<sup>着</sup>生<sup>了</sup>的<sup>人</sup>名<sup>有</sup>來

（「C」巻1，P.1a—2b）

- (2) 「元朝秘史」と並ぶ今一つの貴重な資料 RASHID—AD—DIN の著「集史」（1303年著）では、洪鈞の訳文によれば「蒙兀之出阿兒格乃袞其後人最著者曰孛兒特赤那妻子甚多長妻曰郭幹馬特兒生必特赤干」（洪鈞の著「元史訳文證補」（2557年著）による。）としている。ドーンソンはその著「蒙古史」において、「第八世紀の中葉に當りて阿兒格乃袞山脈より出で斡難，克魯倫，土拉—に Tougoula 諸河の河畔に定住せる部族の多くは 孛兒特赤那 Bourte—Tchina を戴きて首領とせり。」と「集史」より訳出している。（1824年著「I」P.67）
- (3) サナングチェチェンの「蒙古源流」（1662年著）によれば次の如く叙述している。「ボロザ，ジャチイ，ブルテチノなる兄弟三者は諸方に遁げ逃れ，末

弟ブルテチノはグングボ地方に避け行きたまひぬ。

〔そのち彼は〕そのグングボ地方のゴワ・マラルなる鄙娘を娶り………」（江実氏訳P.31）

- (4) 那珂博士の名著「成吉思汗実録」（2567年「元朝秘史」より訳出補註）には次の如く訳している。

「上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。その妻なる惨白き牝鹿ありき。騰吉思を渡りて来ぬ。斡難木噠の源に不見罕合勒敦に營盤して、生れたる巴塔赤罕ありき」（「A」P.1—2）

- (5) 「新元史」（1930年柯劭忞氏撰）によれば、「乞顔之後有李兒帖赤那訳義為蒼狼其妻曰豁埃馬蘭勒訳義為惨白牝鹿皆取物為名世俗附會乃謂狼妻牝鹿誣莫甚矣」としている。

- (6) 「蒙古の秘史」すなわち小林高四郎氏現代語訳「元朝秘史」では次の通り記している。

「上天から命をうけて生れた蒼い狼があった。美しい牝鹿を妻とし、大きな湖を渡って来て、オノン河の源ボルハンハルドンに定住した。ここでバタチハンが生れた。」（「B」P.1）

- (7) 1963年岩村忍氏著「元朝秘史」は次の通り意識している。

「高い天の命を受けて生まれたボルテチノ灰色のオオカミ」という人があった。その妻はゴアイ＝マラル（美しい牝鹿）といった。大海（バイカル湖）を渡ってオノン河の源にあるブルハン山の牧地に住むうちにバタチハンが生れた。」

元初の重要史料でこのほかに残されたものは「元史」・「親征録」・JUVAINIの“TA'riKh—i—Jahan—Gusha”である。「元史」では始祖説話を阿蘭果火の物語よりはじめ、狼鹿交配説話、後にのべる鍛冶の伝説にもふれていない。「親征録」は「烈祖神元皇帝諱也速該」より起筆して始祖説話は述べていない。残る重要資料であるJUVAINIの「世界征服者の歴史」においても、成吉思勃興以前のアジャの形勢から書き始めているが始祖説話は書いていない。従って狼鹿交配の始祖説話について述べている根本資料は「元朝秘史」・「集史」・「蒙古源流」の三者である「元朝秘史」の原本である「チンギス＝ハンヌ＝フジャウル」が既に喪失していることは周知のところである。(1)の「元朝秘史」は明初の訳である。(4)の「成吉思汗実録」と(6)の「蒙古の秘史」は(1)の訳文である。(7)は(1)の訳文であるが厳密な意味で訳文ではない。(2)は洪鈞およびドーソンによる「集史」の訳文である。(3)は「蒙古源流」の江氏訳文である。(5)は「新元史」の原文である。

## B 二つの異伝

この七箇の資料は、大別すれば二つの種類に分けられるのである。すなわちその一つは「元朝秘史」とのその訳文である(4)と(6)であって、

李兒帖赤那(borte cino) 豁埃馬蘭勒(yorai maral)を蒼き狼・惨白き牝鹿（小林氏は美しい牝鹿と訳す）とするものである。その二は「集史」・「蒙古源流」・「新元史」であって、一様にこれを「人の名前」としている。

(7)の岩村氏の訳文は「ボルテチノ（灰色の狼）という人があった」としているのので、この種類の中に入れるべきものとする。従って厳密に「狼鹿交配の説話を伝えるものは「元朝秘史」に限られるのである。

ここで問題となることは、この二種の資料のうち何れが真実を伝えているかということである。「新元史」の撰者柯劭忞氏は、李兒帖赤那はその意味は蒼き狼であり、その妻の豁埃馬蘭勒は訳して惨白き牝鹿であるが、すべて物からとった人名である。これを狼とし妻を牝鹿とすることはこじつけも実に甚しい。と述べて狼か人名かの問題について早くも着眼しているのである。柯氏の「新元史」は「集史」の訳洪鈞の「元史訳文證補」によっていることは明らかである。岩村氏の「元朝秘史」の訳文は正確にいうと意識であって、始祖説話については「集史」の人間説によったものであろう。

## C 狼か人間か

ブルテチノは狼であるか「人間」であるか、問題は勃興当時の蒙古人がそれを真実と信じて語り継ぎ言い伝えていたものはその何れであったかということである。更に言葉をかえるならば「元朝秘史」が真実を伝えているか、それとも「集史」・「蒙古源流」・「新元史」が真実を述べているかということである。しかし現実にはこのように両説が存在する以上、どうしてそのようなことを究明しなければならぬが、端的に結論を述べるならば、「borte cino」は蒼い狼であるとする「元朝秘史」に軍配をあげねばならないのである。

護雅夫氏著の「遊牧騎馬民族国家」にはアジャの遊牧民族国家の始祖説話をあげ、トルコ民族の建てた突厥の始祖が牝の狼であったという伝説、又同じくトルコ民族であった高車の始祖もまた牝の狼であり、又烏孫国の祖先の一人は牝の狼に育てられたことをあげ、更にヨーロッパの農耕民族の間でも狐と共に狼を穀物の神とするところもあり、わが国でも狼が神の使者として神聖視されたこと、遊牧民族の間では農耕民族にもまして狼を恐れ、彼等にとって大切な生活の資本である家畜にとって最も恐るべきこの敵である狼を「聖なる獣」として崇

め、それが纏て祖獸（祖先としての獸の意味）として高められるに至った次第を述べている。又蒙古部族の祖先である蒼い狼が「上天から命をうけて生れ」、高車の始祖である老狼が「天からつかわされたもの」としている謎、すなわち「天降る神靈については、シヤマニズム—Schamanism—の神観に由来すると述べている。（「N」P.39—75）護氏の述べるところ々々尤な解釈であると思うのである。ここでアジャの遊牧民族国家の始祖説話のうち護氏が引用している突厥・高車の始祖説話について検討を加えることは、蒙古狼鹿交配始祖説話の真实性を立証するうえに必要なことと思うのである。

文献通考四裔考二十突厥上によれば、

「突厥之先平涼雜胡也蓋匈奴之別種姓阿史那氏後魏太武滅且渠氏阿史那以五百家奔歸蠕代居金山城狀如兜鍪俗呼兜鍪為突厥因以為號或云其國先於西海之上為隣國所滅男女無少長盡殺之有一兒年且十歲以其少不忍殺之乃別足斷臂棄於大澤中有牝狼每銜肉至其所此兒因食之得以不死其後與狼交狼有孕負至於西海之東止於山上其山在高昌西北有洞穴狼入其中遇得平壤茂草地方二百餘里後狼生十男長大外託妻孕其後各為一姓阿史那即其一也子孫蕃育……」

又一説によると、「又云先出於索國在匈奴北其部落大人日可勝歩兄弟十七人其一曰伊質泥帥都狼所生也………其大兒名訥都陸設衆奉為主號突厥都陸所生子皆以母族為姓阿史那是其一也………」

これによって突厥の始祖は牝の狼であるということが信ぜられていたということがわかるのである。又突厥の姓である「阿史那」は「以母族為姓」と記しているが、「阿史那」は古代トルコ・モンゴ語の「狼」をしめす「チノ」または「チノア」の音を漢字であらわしたものであるという説も肯定できるのである。（「N」P.46—47）

次に高車の始祖説話であるが、同じく文献通考に「高車蓋古赤狄之種也………匈奴單于生二女姿容甚美單于曰此女安可配人將以與乃於國北無人之地築高臺置二女於其上曰請天自迎之乃有一老狼晝夜守臺嗥呼因穿臺下為穴經時不去其小女曰吾父以我與天而今狼來或是處我乃下為狼妻而產子後遂滋繁成國故其好引聲長歌有以狼………」と載っている。

さきに述べた突厥は六世紀の中葉から約二百年間蒙古高原を中心に繁栄した遊牧帝国であって、中国ではこれを突厥と呼んだ。突厥がトルコ民族であったことはたしかである。高車は勿論中国人の呼称であるが突厥がモンゴル高原を支する少し前すなわち五～六世紀モンゴル高原の北に遊牧していたトルコ人の国であった。高車の始祖伝説では老狼がその始祖となっているが、この老狼は牡の狼であって「或是處我乃下」すなわち天の神がつか

わした狼となっているところは、蒙古の始祖である「上天より命ありて生れたる蒼き狼」と似通っているのである。

以上で護氏が説くように、アジャの遊牧民族特にトルコ系民族である突厥や高車が狼を始祖とする伝説をもっていたことは、疑う余地はないのである。

小林高四郎氏は（「E」P.19—20）モンゴル民族は二つの始祖説話をもっていた。その一つは狼鹿交配説話で、その二はアラン・ゴワの光の精をみごもって三人の子を生む話すなわち感生説話である。「第一の説話は十世紀のころモンゴル民族が東方からオノンケルレン河の上流に移って、ここで接触したトルコ系の高車突厥などの民族からえたもので」としているが、護氏も内藤博士の説を引いて、この狼鹿交配説話をトルコ系の民族との接触によって得たものであるとしている（「N」P.44）従って「borte Cino」を蒼い狼とし「royai maral」を惨白い牝鹿とするか、それとも「人の名前」とすべきかの問題は、明瞭な帰結点が得られたのである。「borte Cino」は「蒼き狼」であり「royai maral」は「惨白い牝鹿」である。「元朝秘史」は当時の蒙古人が語りつき言い伝えた蒙古種族の聖なる伝説を伝えているのである。

## D む す び

以上で「borte Cino」が「蒼き狼」であるか「人間」であるかの問題は一応解決したのであるが、そうだとすれば「集史」や「蒙古源流」はどうして「borte Cino」を人名（仮称「人間説」）としたのであろうか。蒙古民族は、さきに述べたように始祖の由来を語る二つの説話すなわち、「狼鹿交配説話」と「光る御子」の伝説すなわち「感生説話（又は感生帝説話）」をもっていたのであるが、蒙古人は更にいま一つの説話をもっていた。これは西方イスラムの史料である Rashid の「集史」に見えるものである。（洪氏の「元史訳文證補」、柯劭忞氏の「新元史」は「集史」によっているのである。）これによると、成吉思汗生誕の二千年前、モンゴル人は他民族によって男女各々二人を残してみな殺しにされた。四人は阿児格乃寢（エルグネ・ホン）山中に逃れたが、そこは地味肥沃で人口は急激に増加したので、鉄鉞を採掘していた坑道に木材を積み火をつけ、七十の風櫃で火勢を強め、鉞坑を爆破して外に出た。というものである。

（「I」P.66—37の意訳）これを仮称「鍛冶に関する説話」とする。

さて蒙古民族の開闢を語る資料がこの三つの始祖説話を、どのようにとり入れているかを図示すると

「元朝秘史 —— 狼鹿交配説話 —— 光る御子の感生説話

- 「集 史」——鍛冶に関する説話——狼鹿交配説話  
 ただし人間説——光る御子の感生説話  
 「元 史」——光る御子の感生説話  
 ○「新 元 史」——鍛冶に関する説話——狼鹿交配説話  
 ただし人間説——光る御子の感生説話  
 ○「ドーソン  
 蒙古史」——鍛冶に関する説話——狼鹿交配説話  
 ただし人間説——光る御子の説話  
 「Juvaini  
 世界征服者の歴史」——始祖説話を載せず  
 「親 征 録」——始祖説話を載せず

○印は「集史」と同一系統の資料（人間説をとる）である。「元朝秘史」のみが狼鹿交配資料である。

再びここで護氏の見解を借ることとする。

「内藤湖南氏は、これ等の伝説について考え、結論として、モンゴル民族がもともと持っていた始祖説話は、アラン＝ゴアが天降った光に感じて「天の御子」を生んだというはなしであって、蒼き狼や、さらにそのまえの鍛冶に関する伝説は、モンゴル民族がトルコ民族と接触したあとになって、そのトルコ民族の始祖説話をとり入れ、自分達に固有の始祖説話のうへつけ加えたものである、といわれました。わたしは、この意見は正しいと思います。」と思のべているが、（「N」P.44）妥当な見解である。それではRashidはどのように積み重ねているかというと、資料(2)に載せたように、モンゴル人の祖先は人口が増加し、「エルグネ・ホン山脈を出てオノン・ケルレン・トゥラ川のほとりに定住した部族の多くは、Bourte Tchinaを頂きて首領とせり、その八世の孫朮奔巴延死するや……………」として光る御子の伝説をのせている。」これで始祖物語は一応のまとまりを見せているが、人口が増加しオノン・ケルレン・トゥラ川のほとりの部族は、それがよし天命をうけていたとしても「蒼き狼」を首領と頂いたという物語に組み立てることはできないのである。従って「Bourte Tchina」という人間としたのである。いいかえると「人間説」は二つの始祖説話の統合から必然的に生れたのである。

次に「人間説」をとっているサナングチェチェンの「蒙古源流」であるが、碩学チェチェンは深淵な仏教思想により、天地の創造より説き来り、釈迦の生誕、チベットにおける仏教の伝説を長々と載せた後「トウベト地方のニヤチイ・ザンボ・ハン大臣に殺され汗位を篡奪せられ、三人の御子の末弟であるブルテチノはグングボ地方に避難し、ここでゴワ・マラルなる鄙娘を娶り、更に道を東方に取り「ブルガン・ガルトゥナ山」地方で衆に頂かれて首領となった……………」としている。全く「狼鹿説

」の入りこむ余地はないのであるが、サナングチェチェンの説く始祖説話については、Howorthがその名著「HISTORY of the MONGOLS」に詳細にのべているが、その結論として蒙古王家の起源をチベットの王家に、更に遡って釈迦牟尼に求め、既にラマ教に帰依していた蒙古人達に迎合しようとするものであったとしている。

「We may safely conclude with Klapproth, Wolff, and others that the identifying of Burtechino with Sha za was the work of the Lamas, who, when the Mongols adopted their religion, desired to flatter them by tracing their reigning house to that of Thibet, and through it up to Sakiamuni himself.」（「M」P.33）

以上で「Borte Cino」は人名でなく「蒼き狼」と訳すべきであることと、「集史」がこれを「人間」とした由来を明らかにしたのであるが、この研究は「元朝秘史」の性格を決定するうえで重要な問題である。ウラヂミルツォフの言葉をもって結びとする。「元朝秘史」は、叙事詩的な物語を連ねて、チンギス・ハン家の聖なる伝説、その「歴史」を記すために書かれたものなのである。（「J」、総論、P.14）